

一申命記 30章・10-14、コロサイ1章 15-20、ルカ 10章・25-37一

イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人も(中略)道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」—ルカ 10章—

## わたしの隣人とは

聖書の古い法典には、『愛の義務』は同胞だけでなく、隣人一般に及ぶべきものとされています。

このような普遍的な考えを内包した律法があるにもかかわらず、その適用となると、ほとんどイスラエルの民の枠を出ないのが現実でした。その考えは、イスラエルが神の選びを強く自覚するにつれ、強くなっていくのです。

新約時代における律法学者たちは、隣人とは、同胞すなわちイスラエルの民の一員だけを示すものと考えていたようです。南北に分裂したサマリア地方の北イスラエル国が、アッシリアに滅ぼされ、二ネベに幽閉されたあと、支配者の同化政策でサマリア地方は異邦人となり、ユダ地方の同胞からは異邦の民とみなされるようになったサマリア

は軽蔑の対象となっていました。

そんな中に登場したイエスは、隣人の概念を決定的に変えることになりました。『隣人を自分のように愛せよ。他のすべての掟はこの隣人愛の掟に集約されている』と。

すなわち、隣人愛の掟は、万人に及ぶこと。それは、自分の友だけでなく、敵をも愛さなければならぬ対象です。そして、敵を愛しうるためには、まず自分の心の中に、ある障壁を全て除く必要があるのです。

主が今日の福音、善きサマリア人のたとえの中で促しておられるのは、誰が自分の隣人であるかを決めるのは、その人自身ではなく、助けを必要とする人に出会えば、たとえ、その人が自分の敵であっても、その人の隣人になるようにとの招きでした。

生粋のユダヤ人を誇る律法学者には、隣人にはなり得ないサマリア人です。

プライド高い人に、その人の非を指摘すれば必ず反発されます。

イエスは人の非を指摘せず、巧みなたとえを用いて、その人の口から答えを引き出されました。

2022年 7月10日

主任司祭 昌川信雄

